

「恩納村歴史・風景散策路」での多言語歩行者系標識による有効性検証実験

照屋正史¹・末光勇次¹・仲村将成¹・相川浩二¹

¹内閣府 沖縄総合事務局 開発建設部 道路建設課（〒900-0006 那覇市おもろまち 2-1-1）

恩納村は、県内でも多くのリゾート施設が立地しており、国内外を問わず多くの観光客が訪れる県内有数の観光拠点である。それに加え、同村においては、近く大学院大学の開校が迫っており、多くの外国人が来訪することが予想される。一方で、同村内の観光拠点への案内（特に案内看板・標識）は、日本語表記が主なものとなっており、訪れる外国人にとっては不便なものとなっているのが現状である。

本報告では、多言語による分かりやすい案内・誘導を行う仕組みづくりを検討し、全国で統一を図る際の基礎データとして調査検討を行い、そこからその有効性を検証するとともに、今後の整備に向けての提案を整理する。

キーワード 実証実験 多言語表示案内方法の提案

1. はじめに

平成22年度の沖縄県における入域観光客数は571万7,900人で、前年度の569万人と比較して+2万7,900人（+0.5%）であった。その内、外国人観光客数は、28万2,800人となり、日本人観光客が微減（対前年度比-8,700人、-0.2%）したのとは対照的に、過去最高の数を記録した（対前年度比 +3万6,600人、+14.9%）。

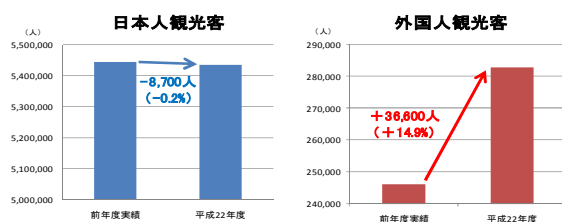


図-1 沖縄県における入域観光客数

また、その外国人観光客の国別内訳を見ると、台湾人観光客が最も多く、次いで香港、中国、韓国、アメリカと続いている。その中でも、香港、中国本土、韓国からの観光客数は過去最高を記録をしており、尖閣諸島問題や東日本大震災の影響がある中で、多くの観光客が沖縄県を訪れている。

今回、多言語歩行者系標識による有効性検証実験を実施した恩納村においては、平成21年度の外国人観光客数は約4万人と、2割弱の外国人観光客が恩納村を訪れている。

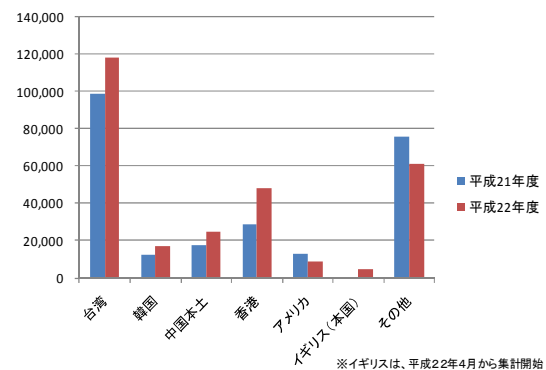


図-2 国別入域観光客数（沖縄県）

2. 実証実験実施経緯

今回実施した実証実験は、国土交通省が実施する「平成22年度道路に関する新たな取り組みの現地実証実験（社会実験）」へ応募し、選定を受けて取り組んだものである。

国土交通省の公募要領において、実験の目的として、「道路に関する先進的または斬新な施策について、当該施策を本格実施するにあたり、効果や影響を確認するため、場所と期間を限定して試行・評価するもの」とされている。今回、本実証実験が選定通知を受けた際、「国土交通省道路局として期待する成果として、観光地等における多言語表示の案内標識方法の提案（標識令への標準パターン追加につながるような基礎的データの収集）を期待する」と添えられた。

3. 現行の標識令について

現行の標識令では、表示内容及び経路等についてマニュアルで規定されており、例えば文字等の基本寸法については、設計速度によってその寸法が規定されている。

ただし、現行の標識令は車両系ユーザーを中心に規定されており、ローマ字表示の基準はあるものの、多言語表記のルールが明確ではない。また、標識令では30km/hが最低設計速度であり、歩行者系標識については、文字の大きさについて明確化されていないことから、車両系とは別の体系づくりが必要だと言える。



図-3 現行の標識令による車両系標識（114-A）（左）、歩行者系案内標識（114-B）（右）

4. 実証実験概要

今回の実験は、恩納村において2箇所の重点エリア（仲泊区、恩納区）を設けて、平成22年12月～平成23年3月までの約3ヵ月間に亘って実施した。

実験期間中、上記2箇所の重点エリアに設置する標識は、自治体でも整備可能な小型で簡易なものとし、恩納村の歴史・風景散策路の観光資源を対象にした多言語表記の誘導標識、及び拠点においては地図標識を設置した。表記言語は、日本語、英語、中国語（簡体字・繁体字）、韓国語の5カ国語とし、加えてピクトグラムを併記した。

これらは主に歩行者を対象としているが、散策エリアには、広く史跡・遺跡が多く点在していることから、レンタカーを移動手段とする観光客も対象とした。

この実験においてアンケート調査を実施し、それを基に標識寸法やデザイン、多言語表示、設置箇所、設置手法について検証を行い、そこから観光地等における多言語表示案内方法の提案を目的とした。

5. 実験エリアの現状と設置標識の検討

2箇所設定した重点エリアの1つである仲泊区は、国指定史跡である「仲泊遺跡」や「歴史の道 国頭方西海道」が通っていることもあり、沖縄の歴史・文化に触れることができるスポットとして、多くの観光客が訪れている。

現在、歴史の道沿いに誘導標識及び地図標識が整備されているが、日本語のみの表記となっており、外国人に

としては不親切なものとなっているのが現状である。

また、もう1つの重点エリアである恩納区は、女性歌人である恩納ナビー生誕地、県有数の景勝地である万座毛がある等、歴史・文化に触れられると共に自然景観を楽しむことができる。

恩納区は、国道58号から少し奥まったところに集落があり、歴史・文化施設が多く点在し、歩いて散策するにはとても良い場所であるが、国道から散策路入り口への案内が無く、加えて集落内に散策ルート案内が無い為、不案内な状況となっている。



図-4 仲泊区、恩納区位置

これらの現状を踏まえ、設置する標識のデザインや配置等を検討することになった。ただし、仲泊区においては、恩納村教育委員会が既存の標識の色や形、大きさ等を変えないでいただきたいという意向があったことから、新設以外の既存の標識については、地図標識の表示面のみの検討となった。

具体的な表記方法と文字の大きさの設定は、下記のとおりとした。

●表記方法

・誘導標識

表示内容は、施設名称、英語、距離、ピクトグラム。色は表示板を白、文字は青色を基本とするが、集落内等の景観に配慮すべき地区は、表示板を白もしくは茶、文字は白もしくは茶とし、支柱も茶とした。

・地図標識

地図、施設名称、ピクトグラムを基本とし、施設の由来や写真等を掲載した。表記は5ヶ国語とした。

●文字の大きさ

・誘導標識

村道等の幅員が広くない道路では、日本語は8cm、国道等幹線に設置する場合は20cmとし、英語はその半分の大きさとした。

・地図標識

仲泊区は既存の標識板が大きいため、日本語の大きさを5cmとし、恩納区は2cmとした。外国語については日本語の3/4程度の大きさとした。

表示標識の設置箇所は、誘導形態に応じた配置とし、経路の曲がり箇所や設置間隔が長くなる場合には、案内が途切れないよう要所に設置し、移動拠点に地図標識を

設置することとした。

また、標識の設置手法については、一般的な道路標識のような単独支柱型や、既設の標識柱やカーブミラー、電柱に添架、ガードレールを利用、壁面利用といった手法の中から、経済性や設置箇所の状況等により検討することとした。

仲泊区は先にも述べたように、既存については地図標識のみが対象であるので、表示面の検討をし、図-5のように表示内容を変更した。また、新設の誘導標識については、図-6のように日本語、英語、中国語、韓国語の表記にピクトグラムを併記した標識を設置した。



図-5 地図標識（仲泊区）



図-6 誘導標識（仲泊区）

恩納区は、恩納ナビ一生涯誕生地を中心とした集落内の散策を目的とした誘導標識、地図標識を設置することとし、スムーズな案内とする為に、図-7のように集落内の移動拠点には地図標識を設置し、各要所には誘導標識を設置した。



図-7 誘導標識（恩納区）

6. アンケート調査の実施と結果

今回の実験の有効性を検証するために、日本人、欧米人、中国人（台湾人を含む）、韓国人を対象としたアンケート調査を実施した。外国人はモニター調査形式にし、現地の案内人と一緒に調査を実施し、日本人はフリーで回ってもらう形式をとった。

表-1 アンケート調査実施日及び参加者

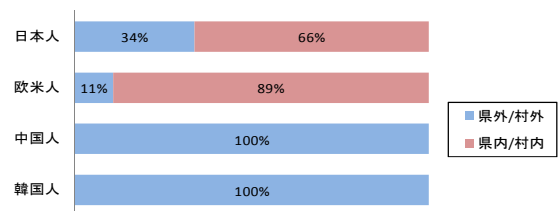
対象者	実施日・期間	参加人数	言語・文字
日本人	H23.2.1～H23.3.4	32人	日本語
欧米人	H22.12.18(土)	10人	英語
中国人	H23.3.5(土)	14人	簡体／繁体
韓国人	H23.2.26(土)	3人	韓国語

アンケートの内容は、下記項目を主なものとした。

- ・現地での状況（設置箇所、設置間隔、案内対象等）
- ・誘導の効果（表示内容、大きさ、デザイン等）
- ・多言語＋ピクトグラムによる案内の有効性
- ・誘目性と周辺環境との調和の検証

これらの回答結果により、利用者のニーズや設置した標識の改善点を把握し、その有効性や今後の課題を検証するものとした。

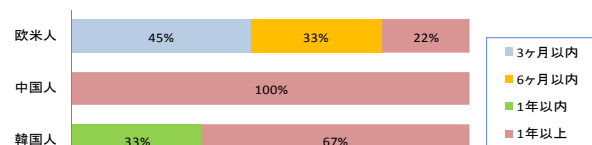
今回、アンケートにご協力いただいた回答者は、中国人以外の男女比率は約半々（中国人は男性が1名）で、年齢は20～60代の幅広い年齢層の方が参加し、中でも30代の参加者が最も多かった。また、居住地については、欧米人は大学院大学関係者ということもあり、恩納村居住者が多いが、その他は県外を含め、村外に居住している方が多くなっている。



※日本人については、県外/県内、外国人については、村外/村内で調査
※中国人については、台湾人を含む
※外国人については、全員沖縄県居住者

図-8 回答者の居住地

沖縄県における居住歴は、欧米人については、半年以内が8割弱となり、中国人と韓国人については、1年以上居住している方が最も多くなっている。



※中国人については、台湾人を含む

図-9 回答者の沖縄県における居住歴

アンケート結果について、まず、それぞれの地区の散策の経験については、仲泊区、恩納区ともに初めて経験される方が多く、現地に不慣れであった。

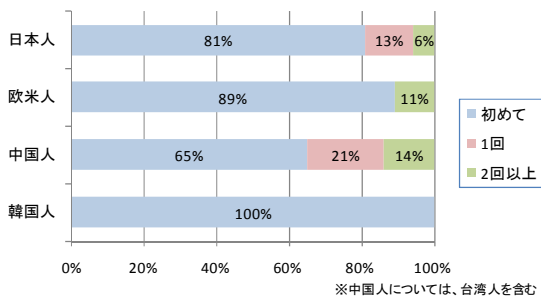


図-10 散策の経験（仲泊区）

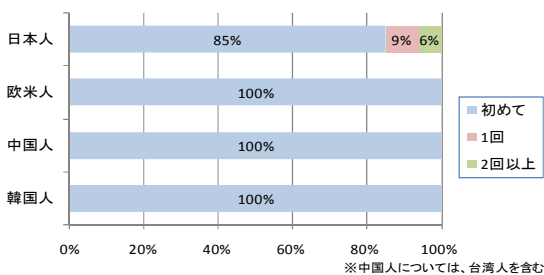


図-11 散策の経験（恩納区）

次に標識の設置箇所についてだが、仲泊区については、設置箇所は概ね良いとの回答であった。しかし、道路から奥まっているため気付かない所があったという意見や、範囲が広いことから車で移動した人もおり、国道から目を引かないという意見もあった。恩納区については、スタート位置から継を案内する標識の位置が分かりづらいという意見や恩納番所跡の地図標識が奥にあり目を引かない、国道にある標識を道路側に寄せた方が見やすいという意見があった。

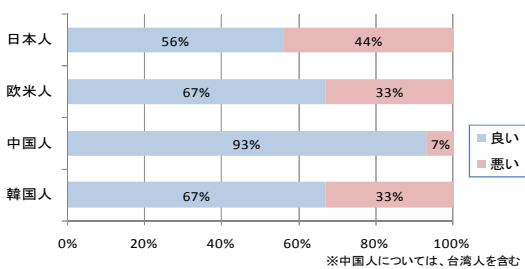


図-12 標識の設置箇所（仲泊区）

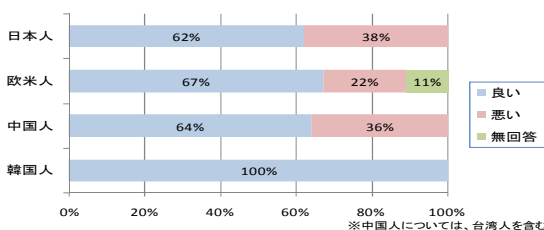


図-13 標識の設置箇所（恩納区）

標識の設置間隔については、仲泊区は広範囲であったこともあり、設置間隔が空いており分かりづらいという意見や、山道での案内を充実してもらいたいという意見があった。また、恩納区では、概ね良いという意見だったが、中には、国道から集落内の駐車場までの案内が必要という意見もあった。

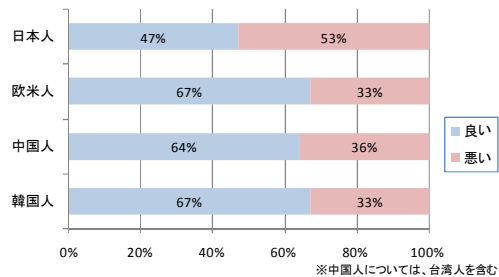


図-14 標識の設置間隔（仲泊区）

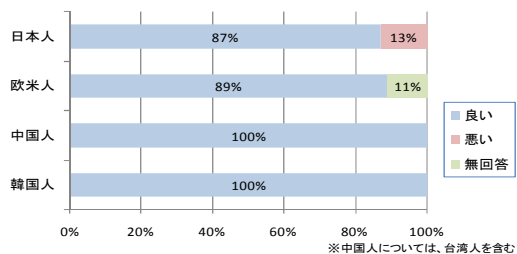


図-15 標識の設置間隔（恩納区）

案内対象とする施設の数について、仲泊区では、増やしてほしいという意見が多く、見晴らしの良い「イユミバンタ」への案内が欲しいという意見があった。また恩納区でも同様に散策地図内にある施設は全て案内して欲しいといった、案内の充実を求める意見が多かった。

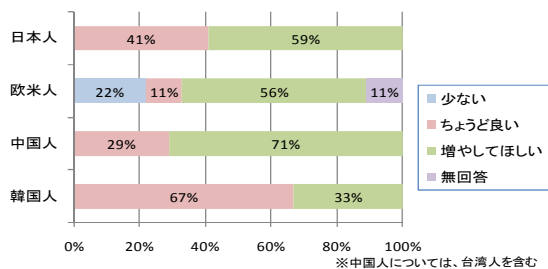


図-16 案内対象施設数（仲泊区）

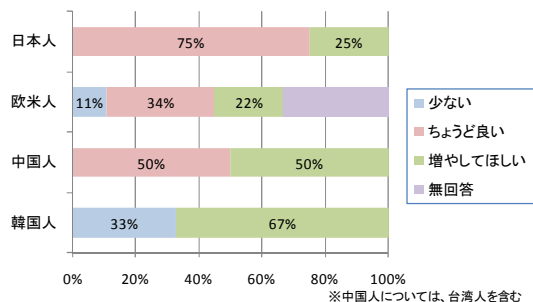


図-17 案内対象施設数（恩納区）

標識の表示内容について、地図標識については、両地区共通で、由来等の説明文を付けて欲しいという意見や距離表示、散策の最終地点から次へ行動する際の案内が求められており、多言語標記については、その必要性が求められている。

また、誘導標識について、仲泊区では、特に案内人が付いていない日本人から、距離が長く間隔がつかめず歩いていて不安だったという意見があった。表記については、全ての参加者から最低限英語は必要であるという意見があった。恩納区では、英語表記だけでも良いが、多言語表記を希望する意見もあった。他に、特に外国人から、矢印表記やピクトグラムがあって分かりやすいという意見や、対象者全てから、複数箇所の誘導標識を掲げる場合は、近い箇所を優先(上に表示)して欲しいという意見があった(図-20:意見を受けての改善策)。

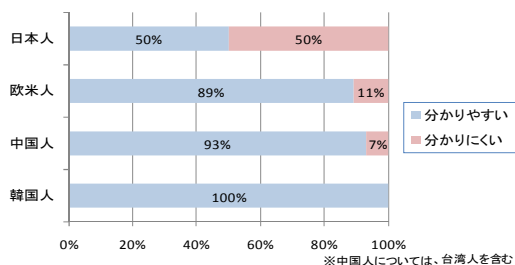


図-18 標識の表示内容について(仲泊区)

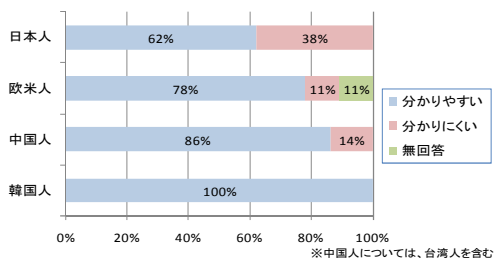


図-19 標識の表示内容について(恩納区)



図-20 誘導標識の改善策(恩納区)

文字の大きさについては、両地区ともに日本語はちょうど良い大きさであるという意見がある一方で、もっと小さくし、情報量を増やした方が良いという意見もあった。外国語の内、英語は、誘導標識については、ちょうどいいという意見が多く、地図標識については、日本語と同じ大きさにした方が良いという意見が多かった。その一方、中国語と韓国語については日本語より小さいことに特に意見はなかった。

景観への配慮で、標識板や文字の色を既存の色ではなく、茶色主体のデザインとした標識については、それで良いという意見がほとんどだった。

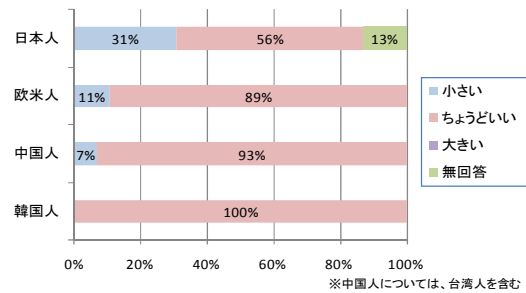


図-21 文字の大きさについて(仲泊区)

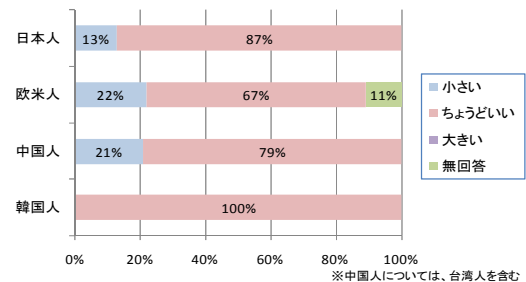


図-22 文字の大きさについて(恩納区)

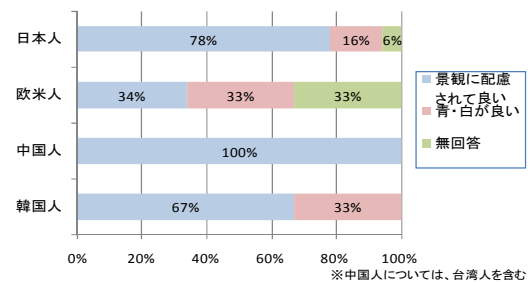


図-23 景観への配慮について(恩納区)

7. 実証実験の検証結果

今回実施した実証実験について、アンケート調査の結果を基にした検証結果下記のとおりまとめる。

- ・歩行者の視点に立つと、誘導標識は道路幅員状況により、10cm 以下でも十分に案内が可能であり、状況に応じた文字サイズの設定が有効である。
- ・地図標識は、日本語と英語は同じ大きさ、多言語は3/4程度の大きさの組み合わせが読みやすい。
- ・最低限2ヶ国語(日本語、英語)表記は必須であり、多言語標記がより親切である。併せて、距離、矢印、ピクトグラムを表記する方が有効である。
- ・複数施設を案内する場合、歩行者系案内標識では、近いところから案内表示する方が分かりやすく有効である。
- ・案内対象施設は、地域との調整が必須である。

- ・散策路終了地点から、次に行動が移しやすいように案内（情報提供）が必要である。

8. 最後に（観光地等における多言語表示案内方法の提案）

本社会実験は、観光地等における多言語表示の案内方法の提案を目指し、標識令への標準パターン追加へつながるような基礎的データの収集を目的に実施した。

そこで、本社会実験から得られた結果を参考に、次のとおり提案を行う。

●誘導標識において複数施設を表示する場合の案内表示方法

標識令では、複数表示する場合、遠い場所から近い場所を案内することとしているが、これは車両系ユーザーにとって分かりやすい案内である。今回の社会実験から、歩行者は、国籍を問わず、近い場所から先に表示していく方が分かりやすいことが分かった。

以上のことから、歩行者系案内標識において、複数施設を表示する場合の案内表示は、近い施設から遠い施設を案内する表示方法を提案する。



図-24 誘導標識の提案

●多言語表記の方法

歩行者系案内標識は以下のとおりとすることが望まれる。

- ① 誘導標識は、日本語、英語表記を基本とし、必要に応じて、それ以外の言語も併記する。
- ② 地図標識は多言語表記とする。
- ③ 地域特有の施設名称は固有名詞として表記し、その施設の持つ意味や役割の説明を付記する。
- ④ ガイドマップ等と連携を図る。

●簡易型歩行者系案内標識の提案

①設置方法

- ・案内経路上の曲がり箇所配置し、設置間隔が長くなる場合は、案内が途切れないよう要所に設置する。

- ・交差道路がある場合は、経路方向を明確にするために配置する。

②設置方法

設置方法は、経済性、安全性、設置の容易性等を考慮し、単独支柱型、既設柱添架型、ガードレール利用型を標準とする。

③表記方法

- ・表示板は白色、文字は青色を基本とする。
- ・ただし、景観に配慮すべき地区（景観形成地区等）に関しては、表示板等の色を変えることも可能とする。
- ・表示内容は原則として、施設名（日本語、英語）、矢印、距離の3表示とする。ただし、状況に応じて、ピクトグラムの表示や多言語表記についても可能とする。

④文字の大きさ

文字（日本語）の大きさは10cmを標準とする。ただし、環境条件や設置条件を勘案した上で文字サイズを設定することも可能とする。

以上の3項目について、本社会実験から得られた結果を参考に提案する。

本報告が、今後の観光地等における多言語表示の案内方法について、標識令への標準パターン追加へつながる上での参考となれば幸いである。

参考資料

- 1) 沖縄県：平成22年度入域観光客統計概況，2011